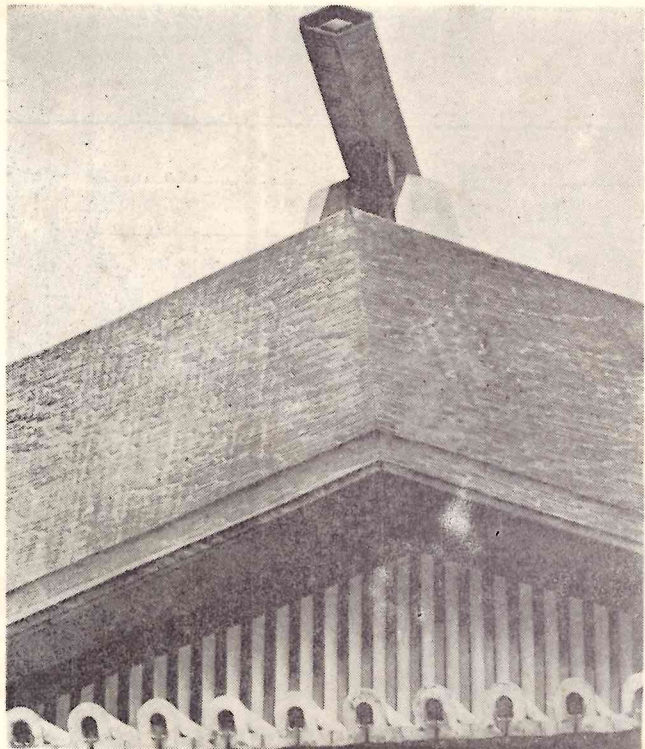


日本民族の指標

不二

新 年 号



大東塾・不二歌道會

日本と世界の転機……影山正治
悲痛なる先人の書簡史料……葦津珍彦

影山正治監修

昭和四十三年十二月二十日印刷 昭和四十三年十二月二十五日発行
昭和二十一年十月十日第三種郵便物認可 (毎月一回二十日発行)

第二四卷第一號 通卷第二四四號

(ひむがし通卷第二九卷・第二八八號)

昭和四十三年十二月二十日印刷 昭和四十三年十二月二十五日発行
昭和二十一年十月十日第三種郵便物認可

不二第二四卷第一號 通卷第二四四號

(ひむがし通卷第二九卷・第二八八號) 定価八十円

歌道會研究会

十一月二十八日日本部に於て遠藤正道會友(全貌社重役)を招き「一九七〇年危機と日本共産黨」と題する講話を二時間にわたつて聴き、終つて活潑な質疑応答を行った。出席者は四十二名で、その大半が青年學生諸君であつたことが注目された。

- 十六日 いわき市民會館に於てい
わき日本國民會議主催に
より小講演會、二十五名。
栃木縣民草農場にて十四
土合同墓碑建碑祭。(前
掲)
- 廿四日 埼玉縣行田市若葉保育園
に於て埼玉縣支部主催小
講演會、六十名。
- 十二月一日 本部主催明治天皇聖蹟巡
訪歌會(別掲)
- 八日 千葉縣護國神社に於て千
葉縣支部歌會、十五名。

塾生募集

- 一、一般塾生 十八歳から三十歳迄の
身心強健な独身男子、學歷不問、
修學期間一ケ年、但し延長を許す
見込の者で高校(夜間)通學を希
望するもの。
- 一、農場要員 中卒又は見込者で昼間
働いて夜間高校定時制に通學した
いもの。(學資のほか月々に応分
の積立を行ふ)他に青壯年者は勿
論、老年者、病余者、半人前の希
望者も受入れの用意あり。
- 一、短期入塾 塾外生
- 申込締切 三月末日
希望者は履歴書を添へて申込まれた
い。

大東塾

編輯後記

○昭和四十四年新年號をお送りする。明治維新百年の年を送り、明年に所謂一九七〇年危機をひかへての四十四年である。正に岐路の年である。「巻頭言」と影山塾長の「日本と世界の転機」を心読されたい。
○葦津珍彦相談役の「悲痛なる先人の未公開資料」は、日本近代史上の最重要資料の一つである。かゝる根本資料を本誌に發表されたことは本誌の光榮である。我々はこの一文を熟読、頭山、内田の道統を再確認し、先人の悲痛をわが悲痛として、新しい真の日韓提携に挺身しなければならぬ。それにしても何と悲痛な書簡か、噫。

不二 第二四卷 第一号
昭和四十三年 十二月廿 日印刷
昭和四十三年 十二月廿五日発行
(毎月一回廿五日発行)
東京都港区北青山三丁目三の二七
編集兼發行人 鈴木 正 男
東京都港区北青山三丁目三の二七
印刷所 大東塾印刷部
東京都港区北青山三丁目三の二七
發行所 大東塾・不二歌道會
振替東京一九〇四二番
電話青山 〇九六三番

聖寿萬歳・頌春

主宰 影山 正治
 参与 長谷川幸男 荒木 精之
 影山銀四郎 原 真弓
 藤井 芳人 小山 寛二
 赤木 一郎
 贊助 三浦 義一 浅野 晃
 保田与重郎 外一同
 相談役 永井 了吉 花見 達二
 葦津 珍彦 安津 素彦
 鴨居 正桓 佐藤 通次
 外一同
 会友 加藤三之輔 室崎 清平
 須磨 清宣 水野 久直
 酒井 利行 吉川 豊
 外一同
 全国常任中央世話人一同
 全国中央世話人一同

支部
 北海道札幌支部 北海道留萌支部
 北海道旭川支部 山形県支部
 岩手県支部 福島支部
 石城支部 茨城県支部
 両毛支部 埼玉県支部
 千葉県支部 多摩支部
 神奈川県支部 新潟県支部
 富山県支部 石川県支部
 長野県支部 豊橋支部
 名古屋支部 岐阜県支部
 大阪支部 岡山県支部
 広島県支部 島根県支部
 宇部支部 下関支部
 愛媛県支部 高知県支部
 福岡県支部 大分県支部
 佐賀県支部 熊本県支部
 長崎県支部
 联合会
 中央联合会 北海道地方联合会
 東北地方联合会 北陸地方联合会
 四国地方联合会

(稲葉案)は充分可能である。そして、この正道のみが、正

目次

第二十四卷・第一号

巻頭言……………(二)

旅にて……………影山正治(四)
 大三輪……………原真弓(四)
 献詠歌抄……………影山銀四郎(四)
 都羅山上……………赤木一郎(五)
 福井にゆきて……………荒木精之(五)
 晩秋に思ふ……………長谷川幸男(五)
 どこへ行く……………藤井芳人(六)

日本と世界の転機(上)……………影山正治(七)

随筆
 明治天皇のお歌……………田中克己(三)
 夜雨の葛……………宮崎九萬一(四)
 新春出初式……………北村茂(五)
 箱根塔の沢……………並木衣子(七)

悲痛なる先人の書簡史料……………葦津珍彦(三〇)

日本歴史における暴君と皇統断絶の

問題点(上)……………岩越元一郎(三九)

わが道……………辻寛一(一八)
 雪の楽章……………西川青濤(一八)
 教育所感……………高橋彌太郎(一八)
 神嘗大祭……………吉本弘(一八)
 羽黒の雨……………京田民雄(一九)
 父を思ふ……………鮎本刀良意(一九)
 みたままつり……………森武次(一九)
 師を迎ふ……………細木勲(一九)

剣道百年の歩み……………細木勲(三四)
 昭和新宮殿拝観記……………鈴木正男(三八)
 不二歌壇……………影山正治選(四二)
 推薦圖書——『日本の童話』……………(四七)
 道友通信……………
 表紙……………新宮殿破風

一、新年度の着眼点を「勇敢に」に置きたい。

二十四年パリに於て刊行され翌二十五年日本に於て翻譯公刊され
たルーマニアの作家ゲオルギューの小説『二十五時』である。

この小説の結末は、第二次世界大戦に於て勝利を収め、世界を
二分したアメリカとソ連が、全面的第三次世界大戦に突入するこ
ろで終つて居る。ここでゲオルギューは、新西洋である米・ソ
両国の共倒れを予言して居るのである。そして、西洋には、旧西
洋にも、新西洋にも、資本主義にも共産主義にも何らの救ひのな
いことを云つて居るのである。一日は二十四時間である。救ひの
あり得るのは二十四時までである。しかし西洋の時計は今やすで
に二十五時を指して居る。そこにはただ絶望があるのみであるとい
ふのである。ただこの小説の中で、ゲオルギューは、西洋に於
て、ノアの洪水の時の箱舟のやうな極少の生き残りの可能性と、
東洋からの光明発生の際かな可能性を匂はせてゐるにすぎない。

第二次世界大戦後の世界は、米・ソ二大陣営に分れたが、やが
てアメリカ陣営内に於ては米・仏の対立が、ソ連陣営内に於ては
昭和二十四年に共産革命を実現した中共とソ連の対立が起つ
て多極化の方向に進み、第三次世界大戦は全面的、直接的な形で
はいまだ起つてゐないが、代理戦争、局地戦争の形ではすでに始
つて居るといふ見方も成り立ち得る状況にはかならない。大局的
に云ふならば、世界は、大西洋時代から、アメリカとソ連と中共
中国と日本を主体とした太平洋時代に入ったわけである。この期
に行はれた自由・共産両陣営の代理戦争である朝鮮戦争とベトナム
戦争は、いづれも太平洋正面のものにはかならなかった。

なほ、この間、第二次世界大戦終結後十一年の年、昭和三十一年
に、その開戦の年以來音信不通になつてゐたポール・リシャール
翁のところから大川周明博士のところへ突然書面がとどけられ
た。ポール・リシャール翁はアメリカの或る大学の哲学教授をし

てゐた。

その書面の中には、「砂漠の如きアメリカの精神界」とあり、
また「アジアの新中国たる日本」とあつた。またその書面に添へ
られた詩の中には、「絶頂に登ることは可能なれど永久にそこに
立つは不可能なり／＼実に高き頂上に登るためには一旦低き頂上
に下らざるべからず／＼暗夜の降下の後新しき黎明への登高あり」
「曾てアジアの強國たりし日本は今や実に偉大なる夢を抱く／＼日
本の蘇生は新しきアジアの輝く心たらむためなり／＼かくて再びア
ジアより世界の光輝かむ」とあつた。

翌三十二年七月、このポール・リシャール翁の書面と詩の訳文
は、大川博士の口述の解説とともに私の手にとどけられ、我々の
方の機関誌『不二』誌上に紹介された。そして、心ある日本人の
心魂に再度の登高への深い勇氣と情熱とを与へてくれた。死の病
床上にあつた大川周明博士はその解説の中で次のやうに述べた。

「リシャール君は、戦前の日本に莊嚴なる期待をかけ、日本の
本質に就ての透徹せる理解と将来の日本の使命に就ての偉大な
期待を『告日本国』と云ふ一文に發表した。そして無残なる
敗戦に、表面は米領日本となり果てた今日の日本に對しても、
往年と毫頭変らぬ期待をかけ、日本は必ず蘇生して新しき亜細
亜の心となり、亜細亜は之に依つて世界の光となること、即ち
日本人は人類の爲の眞実なる文化の創造者たるであらうことを
堅く信じて居るのである……私はリシャール君の手紙と詩によ
つて魂を動かす様な力を与へられた。此の力が必ず私の病氣恢
復を促すであらう」

そして、この時より半年後に大川周明博士は七十二歳を以て歿し
た。その心友ポール・リシャールが亡くなつたのは、それより十
年後、昭和四十二年の六月、享年九十一歳であつた。(未完)

明治天皇のお歌

田中 克己

十一月三日はわたしの記憶
では雨が降つたことがない。

菊花香るよき時節で、ゆきか
ふ人も楽しげである。終戦の
あと、関西にゐたが、この日
伏見桃山の御陵に詣でた。掃
除はよく行きとどき、松の緑
と白砂の對照が美しいが、わ
たしはその砂の上にお賽銭の
散らばつてゐるのを見て嗚咽
した。突然のことで自分でも
よくわけがわからなかつたが
「申しわけない」思ひで一杯
であつた。

わたしは明治四十四年八月
卅一日の生れで、明治生れの
最後に近い。大帝は十年の御

宿痾で御自覚であつたと思ふが
この年も數々の政務に當られ、
そのあひまに十萬余首の御製の
最後の部分を御作りになつてゐ
る。

わがころをさなくなりぬう
ぶごゑをあげにしさと昔が
たりに

四十四年の御製で京都御所に
お住ひのころを侍臣あひてにお
かたりであらう。ただし皆人の
存じ上げることく、大帝はどう
いふおつもりか京都御所への行
幸はほとんどなさらなかつた。
明治生れの詩人犀醒の「ふるさ
とは遠きにありて思ふもの」と
いふのは、この御心に同感の態
があらはである。ただし御所の
御生活は決してお忘れになつて
ゐない。同年の

たらちねの親のみまへにあり
と見し夢の惜しくも覚めにけ
るかな
は正しく孝明天皇のお夢を拝さ

れてのお作である。

同じお気持は昭憲皇太后のお
歌にも歌はれてゐて

わが君が産湯となりし祐の井
の水は千代まで枯れじと思
ふ

のお作も同じく明治四十四年の
ことである。

翌四十五年のお作は
ふく風の枝をならさぬこの春
は花のさかりぞ久しかりける
は御一言で可能であるはずなの
にとふしきでもあり、恐れ多
くもある。

この夏のお歌にも

山近くすみし都をなつかしと
さらにぞ思ふ夏の來ぬれば
があり、七月三十日の御崩御で
あるから、西京に對するお考へ
のいつもおかはりなかつたこと
を存じ上げるべきである。

ただし千代田城のお住まひも
決して、とほられなかつた趣は

この年のお作（わたしのいま
用ひてゐる角川文庫「明治天
皇御集・昭憲皇太后御集」昭
和四十二年版）の最後に掲げ
られてゐる。

なすことのなくて終らば世
に長きよはひをたもつかひ
やなからむ

若き世におもひさだめしま
ごころは年をふれどもまよ
はざりける

調べの高さはもとより、御
生涯を簡潔にお表はしになつ
て感激に堪へない。

暮れぬ間になしはてばやと
おもへばや夕はものはか
どりにけり

まだ御年六十一でみせら
れながら、御病状の御自覚は
おはせられたとおもふ。叙位
叙勲の御親署にいたるまで、
おん自らなさるべく思し召し
たことは多かつたらう。わた
しども老來怠けがちの者には

まことに申し上げやうのない
ありがたい御心づかひである
降る雪や明治は遠くなりに
けり

はわたしどもと同じく、明治
末近くの生れなる草田男の句
である。明治生れは全人口の
五パーセントとか、いたづら
に固陋な言をなしたくないが
遠いからとて忘れ去つてはな
るまい。思へば昭和十七年、
シンガポールで「建設戦」と
いふ兵隊新聞の遷をしてゐた
時、手島一等兵といふのが投
じた

大君の命としあれば海のは
て空のはてまでわれはゆく
なり

といふ歌はいまだに忘れられ
ない。空海のはてから生き還
つたとしたら、ゆつくりと話
しあひたく思ふのも、大帝の
御歌好みと無関係ではあるま
い。(成城大学教授・詩人)

夜雨の葛

宮崎九萬一

大正十五年夏、東北大學在學
中の俳人芝不器男は、郷里の愛
媛縣北宇和郡明治村(現松野
町)松丸に歸省した。旧庄屋で
あり、これまで手広く営んでゐ
た家業の養蚕・蚕種業もこのこ
ろでは衰微のきざしがあつたが
夜川と稱する川狩りを楽しんだ
り、裏山の河護の森に登つて読
書にふけたものである。さら
には五男二女の末子である不器
男の歸省を、老母がことのほか
に喜んでくれた。郷里の川原や
野山には、いたるところに葛の
葉が茂つてゐた。
九月も下旬となり、宇和島港
より汽船に乗り、大分で新聞記

者をしてゐる兄馨三を訪ねた。
松丸の話、芝家の話、そして俳
句の話がはずんだのは申すまで
もない。二十二日の昼、西大分
から紅丸の二等に乗り込み、波
静かな瀬戸内海を渡つて、翌二
十三日の朝神戸港に上陸した。
それから三の宮で三等特急を捕
へて、その日の晩に東京着。す
ぐ上野に向ひ、そこで汽船汽車
での疲勞を二三時間でいやした
その夜、十一時發の青森行普
通列車に乗り込んだ。上野では
それまでに急行は二つもあつた
けれども、疲れてゐたので、こ
んではたまらないと思つて、夜
中に出る最後のさびしい列車を
わざわざ選んだ。その列車が、
東北の小さい駅々をこくめに
拾つて行くのが、いかにも楽し
いことであつた。△この道筋は
御承知通り、芭蕉が晩年に真劍
の行脚をしたところだ。△と郷
里の長兄嫁に便りしてゐる通り

不器男は芭蕉の心に浸りなが
ら、落莫なる感じの、がらん
どうに空いてゐる汽車に身を
まかせたのである。そうして
到底わからない方言で訥々と
會話をこぼす土俗に親しみを
感じたものである。殊に、ロ
イド眼鏡や断髪すめのゐな
いことが有難いことに思へた
郡山あたりで窓外がしらみ
だし、この駅で朝の弁當を買
い求めた。身体がびりびり引
き締るやうな明け方の冷気で
あつた。窓外は驟雨でぼうつ
とかすんでゐた。まるで郷里
松丸の「冬隣り」といつた気
候である。と、ちらりと葛の
葉が目をかすめた。
奥の細道に書かれてある那
須、白川、二本松、福島、飯
塚、桑折、伊達の數々の駅名
さては八名取川を渡り仙台に
入る。あやめふく日なり△と
いふ箇所を練り返し思ひおこ

しながら仙台に着いたのは、
九月二十四日の午前十時頃で
あつた。

下宿先の市内連坊小路・瑞
雲寺に歸つたら、お寺のみな
な——住職夫妻、下宿の大學
生や勤めの人々が驚喜歓迎し
てくれた。早速と蓬髪を刈り
風呂に入り、昼飯を食べるな
り布団にもぐり込み、目がさ
めた時には電灯に顔を照され
てゐた。二日間の疲勞、二日
間の睡眠不足も回復し、本當
に生き返る思ひであつた。

見たがつてゐた俳誌『天の
川』八月號も届けられてゐた
まるで自信がなかつたのに、
やはり巻頭であり痛快至極。
麦車馬におくられて動き出づ

人入つて門のこりたる暮春
なか

これは巻頭五句のうちのもの
俳句に興味のない人々でも
「ムギググルマ・ウマニオク

レテウゴキヅ」と口づさむが
よい。馬の鞍と轡を結びつけた
装具がきしんで緊張し、馬が足
に力を入れた、そのわづか後に
麦を一ぱいに積んだ車がゴトリ
と動きはじめ。馬と麦車との
わづかな動きの差——それは初
句と二句目とのしらべによつて
も正確無比に表現されてゐるの
である。

二十五日仙台につく、み
ちはるかなる伊予の我が
家を思へば

あなたたる夜雨の葛のあなた
かな

不器男の代表作といはれるこの
句は、この時に作られたのであ
る。従つて二十五日とあるのは
實際には九月二十四日なのであ
る。

伊予の國からはるばる仙台に
來たときの道程を顧み、「あな
たなる」とまづ郡山あたりで眺
めた夜雨の中の葛を心に浮べ、

さらにまた思ひを郷里にはせる
と、またはるばると遠いことで
あると感ずる。△丁度絵巻物に
でもして見ると、非常に長い部
分は唯真つ暗で、一面に黒く塗
つてある許りで、それから少し
明るい夜雨の降つて居る葛の生
ひ茂つて居る山がかつた光景が
描き出されて、それから又非常
に長い黒い所があると云つた様
な者である。その黒い所といふ
のははるばる郷里を思ひやつた
情緒である△といふ高濱虚子の
歴史的名鑑賞がある。

後年、山本健吉はこの句を評
して△あなたなるの繰返しに、
何故か「お母さん！お母さん！」
と呼ぶ切ない思慕の聲を聴取る
のである△と述べてゐる。知ら
ず、まことや、この句とともに
不器男は、萬斛の祈りをこめて
次の句を書きつけてゐたのであ
る。

うちまもる母のまろ寝や法師

蝉

(宇和島商業専門學校長)

新春出初式

北村 茂

明日から愈々師走、今夜は
丁度三日か四日目に廻つて來
る當直で、いつ鳴り響くかも
知れない非常ベルを心のどこ
かで気にし乍ら広い消防署の
本部事務室の未整理書類の山
積した古びた机に向ひ静かに
想出にひたり、ふつと気がつ
いた様にペンを走らせてゐる
間もなく訪れる昭和四十四年
の新春は私には何かしら嬉し
いやうでもあり、又佻しい様
な誠に複雑な妙な氣持である
私は北海道の名寄市の隣にあ
る小さな下川といふ寒村で田
舎町独特の百貨店まがひの雜